

CONTENTS

現場に役立つ日本語教育研究 5 目次

まえがき 中俣尚己 iii

序章	コーパスを活用した例文作りのための研究を どう進めるか(中俣尚己)	V
第1章	話題・対象を表す表現(澤田浩子)	1
第2章	状況・場合を表す表現(堀内 仁)	23
第3章	時を表す表現(建石 始)	45
第4章	様子・予想・傾向を表す表現(太田陽子)	67
第5章	条件・逆接条件を表す表現(中俣尚己)	91
第6章	原因・理由を表す表現(中俣尚己・内丸裕佳子)	113
第7章	逆接を表す表現(清水由貴子)	135
第8章	意志・願望・判断を表す表現(加藤恵梨)	159
第9章	伝聞を表す表現(小西 円)	181
第10章	否定を表す表現(茂木俊伸)	203

あとがき 山内博之 223

索引 237

執筆者紹介 239

まえがき

中俣尚己

この本『コーパスから始まる例文作り』は、日本語教師が日々の授業で使用する例文を作る際のヒントとなりうるようなデータを提供することを目的とし、本論文集シリーズの名の通り、「日本語教育の現場に役立つ」論文集となることを目指して編まれたものである。10人の執筆者で議論を重ね、日本語教師に役立つ情報を厳選していけばいくほど、その姿は論文からハンドブック寄りに変貌していった。最終的には中俣(2014)『日本語教育のための文法コロケーションハンドブック』の続編のような形に落ち着いた。

この本では『文法コロケーションハンドブック』の読者から要望が多かった、教師が説明に困るような中上級項目を扱った。また、調査したコーパスが書き言葉コーパスであることを考慮し、「中上級のアカデミックライティングなどで必要となる項目」に絞っている。より多くの項目を扱いたいという思いもあったが、紙幅の関係上、項目を絞った。

この本で扱う項目には教師が例文を作りにくい項目(つまり、「これはいつ使うんだろう」と思う項目)や、前に来る要素が限られていて、ルールを教えるだけでは誤用の原因になる項目(つまり、「風邪ぎみ」とは言えるが「病気ぎみ」とはあまり言わないといったことなど)が多く含まれる。これらの項目の指導には、単にルールを教えるだけでなく、典型的な例を、根拠を持って示すことが必要であると考えた。そのためにとったアプローチがコー

パス (Corpus)、すなわち実際に使用された言語の、電子化された大規模データベースを使用することである。具体的には『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese, BCCWJ)を利用した。そして、特に2つのC、すなわちコロケーション (Collocation) とコンテキスト (Context) に注目するというアプローチを本書の全ての項目に対して行った。前にどんな語が接続するのか、同じ文の前後にはどんな語がよく共起するのか、そして、どんなレジスター (使用域) で使用されるのか。それらを総合的に考察した上で、意味を捉え、最も典型的な例文を作るという試みである。

もちろん実際の授業では1つの例文を示して終わることはあり得ず、良質な多数の例文が必要である。そのための材料として、どんな語が前後に出現するのか、そしてどんなレジスターに出現するのかというリストも提示している。ある意味こちらこそがこの本の肝と言える部分である。この本のタイトルの「例文作り」という言葉には、現場の教師が例文を作る際の手助けができれば、という気持ちを込めた。

この本は「様子・傾向を表す表現」「原因・理由を表す表現」のように大きな機能ごとに中上級項目を分類、配列し、各章を1人の人間が担当執筆している。具体的に扱った項目については巻末の索引を参照されたい。そして、各章の中で似ていると思われる項目を比較しながら、「2つのC」を記述していく。しかし、必ずしも前から順に読む必要はなく、ハンドブックとして使えるように制作した。また、中上級項目は類義表現も多いので、章の中で関連する項目も適宜参照していただければと思う。この本が、導入と説明、練習問題、宿題やテストといった授業の様々な局面で役に立つことを願う。

参考文献

- 中俣尚己 (2014) 『日本語教育のための文法コロケーションハンドブック』 ころしお出版。
- Conzett, J. (2000) Integrating collocation into a reading & writing course. In Lewis, M. (ed) *Teaching collocation: Further development in the lexical approach*, pp. 70–87. Hampshire: HEINLE CENGAGE Learning.

序章

コーパスを活用した例文作りのための研究をどう進めるか

中俣尚己

この章では、この本の執筆の手順について説明する。「まえがき」にも書いた通り、本書ではアカデミックな文書でよく使われる中上級項目をターゲットとし、それらを「原因・理由を表す表現」「対象・根拠を表す表現」など10の機能に分類した。そして、それぞれの機能の中で、対象にする項目を10前後選んだ。ただし、旧日本語能力試験出題基準でいう3・4級項目、いわゆる初級項目は中俣(2014)で扱っているため除外し、1・2級項目を中心に収録した。その上で、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)での出現頻度が多い順に選んでいる。厳密な順番ではなく、順位がやや低くても記述する価値があると執筆者が判断したものは選ばれている。

各章では最初に重要度の目安として対象とする項目の出現数と、難易度の目安として旧日本語能力試験の出題級を示す(国際交流基金・日本国際教育協会(編)1994)。それから、項目を2~4個ごとにまとめ、比較する形で記述していく。まずはそれぞれの語の典型的な例文と機能の解説を示す。その後、適宜リストにまとめる形で、出現数、前接語の品詞の割合、前接語、前文脈や後文脈に共起する語(副詞や文末表現など)、生産性指数、特徴的なレジスターなどを示す。以下、各項目の執筆方法について解説する。なお、ジャンルや品詞の細かい内実など、BCCWJの設計や特性に関しては国立国語研究所コーパス開発センター(2015)を参照して頂きたい。

第 1 章

話題・対象を表す表現

澤田浩子

1. はじめに

この章では、話題・対象を表す表現について、表 1 に挙げる 9 つの形式を取り上げる。そして、前接語や後文脈の特徴から、各形式の意味や用法、よく用いられる表現型の違いを示す。各形式の BCCWJ における出現数は表 1 の通りである。データは基本的に中納言の長単位検索を利用して収集した。

表 1 この章で扱う形式と BCCWJ における出現数、該当レベル

	形式	出現数	該当級		形式	出現数	該当級	
話題を表す形式	N とは	43,343	/	対象を表す形式	N について	96,899	2 級	
	N って	29,785	/		N に関して	34,386	2 級	
	N というものは	2,820	/		N をめぐって	3,565	2 級	
	N というのは	13,580	/					
	N といえば	3,539	2 級					
	N となると	1,113	/					

「N とは / N って」の 2 形式については、ここからランダムに 3,000 例を抽出したうえで、話題を表す用法のみを手作業で選別し、最終的に「N とは」1,292 例、「N って」2,433 例を分析の対象とした。また、「N について / N に関して / N をめぐって」の 3 形式は、それぞれ「N につきましては」

第2章

状況・場合を表す表現

堀内 仁

1. はじめに

この章では、状況・場合を表す表現について、主に中納言の長単位検索を用いて BCCWJ コーパスデータの分析を行い、日本語教育における例文作りのヒントを提供する。状況・場合を表す表現のうち、この章では表 1 に示した 13 項目を扱う。項目の選択にあたっては、庵・高梨・中西・山田 (2001)、市川 (2007)、友松・宮本・和栗 (2007)、グループ・ジャマシイ (編著) (1998) を参照した。

表 1 この章で扱う項目と BCCWJ における出現数、該当レベル

	形式	出現数	該当級		形式	出現数	該当級
空間的・時間的位置	において	47,855	2 級	状況に 応じた 変化・対応	にともなって	1,331	2 級
					につれて	1,144	2 級
空間的・時間的範囲	にかけて	3,270	2 級		にしたがって	480	2 級
	にわたって	2,777	2 級		によっては	4,469	2 級
	を通じて	5,612	2 級		に応じて	4,058	2 級
	を通して	4,666	2 級		次第で	916	2 級
			多様な 状況に 対して一定		にかかわらず	1,132	2 級
				を問わず	1,127	2 級	

第3章

時を表す表現

建石 始

1. はじめに

この章では時を表す表現について共起語と文脈の観点から分析を行う。ここでは友松・宮本・和栗(2010a, 2010b)を参考にして、時を表す表現を「時点・場面」と「時間的前後」に分ける。扱う形式と出現数、該当級は以下の通りである。データは中納言の長単位検索を利用して収集した。

表1 この章で扱う形式とBCCWJにおける出現数、該当レベル

	形式	出現数	該当級		形式	出現数	該当級
時点・場面の表現	際(に)	7,409	2級	時間的前後の表現	Vたとたん(に)	1,942	2級
	にあたって	4,128	2級		V(か)と思うと	864	2級
	に際して	1,683	2級		Vなり	1,275	1級
	最中(に)	1,460	2級		Vやいなや	331	1級
	おり(に)	669	1級	時間的前後の表現	Vで初めて	1,805	2級
時間的前後の表現	Vてからは	1,423	2級	V次第	306	2級	
	Vて以来	1,349		Vが早いか	60	1級	
時間的前後の表現	うえで	4,086	2級				
	とともに	10,046	2級				

第4章

様子・予想・傾向を表す表現

太田陽子

1. はじめに

この章では、様子・予想・傾向を表す表現について分析を行う。扱う形式とその出現数、旧日本語能力試験の該当級は表1のとおりである。

表1 この章で扱う形式と BCCWJ における出現数、該当レベル

	形式	出現数	該当級		形式	出現数	該当級
傾向の 接尾辞	がち(だ)	3,884	3級	予想・ 可能性の 文末表現	見込みだ	184	1級
	ぎみ(だ)	1,950	2級		見通しだ	108	1級
	っぽい	5,586	2級		見込みがある	63	1級
	めく・めいた	972	1級		おそれがある	1,881	2級
様子・ 状態の 接尾辞	だらけ(だ)	1,916	3級				
	まみれ(だ)	504	1級				
	ずくめ(だ)	175	1級				

「だろう／かもしれない／はず(だ)／よう(だ)／そう(だ)」など、様子・予想・傾向を表す表現の多くは主に初級で扱われ(中俣 2014 参照)、中級以降はより細かい差異を伝える表現が中心となる。ここでは、特に使い分けが問題とされてきた「がち(だ)／ぎみ(だ)」「だらけ(だ)／まみれ(だ)／ずくめ(だ)」に重点を置いて記述を行っていく。

第5章

条件・逆接条件を表す表現

中俣尚己

1. はじめに

この章では条件・逆接条件を表す表現を扱う。日本語の条件表現には「雨が降ったら行かない」のような順接条件と「雨が降っても行く」のような逆接条件があり、この章ではその両方を扱う。扱う形式とその出現数は以下の通りである。データは基本的に中納言の長単位検索を利用して収集した。

表1 この章で扱う形式とBCCWJにおける出現数、該当レベル

	形式	出現数	該当級		形式	出現数	該当級
順接条件	とすると	2,117	/	逆接条件	ても～ても	2,064	/
	とすれば	1,633	2級		としても	6,520	2級
	としたら	778	2級		にしても	961	2級
	となると	2,729	/		どう～ても	1,344	/
	となれば	1,228	/		いくら～ても	2,534	/
	てみると	8,268	/		何+助数詞～ても	833	/
	てみれば	3,273	/		にせよ	2,481	2級
	てみたら	2,297	/		にしろ	1,620	2級
				(よ)うが	1,154	1級	

第6章

原因・理由を表す表現

中俣尚己・内丸裕佳子

1. はじめに

この章では原因・理由を表す表現について共起語と文脈の観点から分析を行う。扱う形式とその用例数は以下の通りである。データは基本的に中納言の長単位検索を利用して収集した。なお、評価を含む表現の「たばかりに」は用例が少ないため、詳しい考察は行わない。

表1 この章で扱う形式とBCCWJにおける出現数、該当レベル

	形式	出現数	該当級		形式	出現数	該当級
評価を含む表現	せいで・せいだ・せいか	8,139	2級	納得を含む表現	だけに	5,844	2級
					だけあって	482	2級
	おかげで・おかげだ	4,329	2級		とあって	423	1級
	たばかりに	133	2級		硬い表現	ため	9,774
個人的経験を 含む表現	もの・もんだから	2,559	1級	ゆえ		2,810	1級
	もの・もん	4,931	2級				

2. 評価を含む原因・理由表現「せいで・せいだ・せいか／おかげで・おかげだ／たばかりに」

P せいで Q / Q は P せいだ……よくない出来事 Q が起こった原因は P だ。

第7章

逆接を表す表現

清水由貴子

1. はじめに

この章では逆接を表す表現について、共起語と文脈の観点から分析を行う。逆接を表す表現には、「しかし／でも／ところが」のような接続詞や、「ながらも／つつも／にもかかわらず」のような複数の語が結びついた接続助詞的なものもあるが、この章では両方を扱う。扱う形式とその出現数は以下の通りである。データは基本的に中納言の長単位検索を利用して収集した。

表1 この章で扱う形式と BCCWJ における出現数、当該レベル

	形式	出現数	当該級		形式	出現数	当該級
高頻度グループ	しかし	68,609	/	癖ありグループ	ものの	7,454	2級
	でも	36,706	/		くせに	1,394	2級
	だが	17,871	/		にもかかわらず	5,571	2級
	ところが	11,394	/		それなのに	1,202	/
類義語グループ	ながらも	4,121	1級				
	つつも	1,065	2級				

以下では、上記の10の表現を、BCCWJでの出現数が1万例以上である「高頻度グループ(しかし／でも／だが／ところが)」と、通常の逆接の意味に、独特のニュアンスが加わる「癖ありグループ(ものの／くせに／にもかかわらず／それなのに)」、相互に意味の類似が見られる「類義語グループ

第8章

意志・願望・判断を表す表現

加藤恵梨

1. はじめに

この章では意志・願望・判断を表す表現について分析を行う。扱う形式とその出現数は以下の通りである。データは中納言の長単位検索を利用して収集した。

表1 この章で扱う形式と BCCWJ における出現数、該当レベル

	形式	出現数	該当級		形式	出現数	該当級
意志の 文末表現	(よ)うとしない	1,659	2級	判断の 複合助詞	からいえば	628	2級
	まい	941			からいって	549	2級
願望の 文末表現	たいものだ	1,432	2級		からいうと	314	2級
	たいな(あ)	922			からすれば	967	2級
判断の 文末表現	ような気がする	5,628	2級		からみて	857	2級
	ように思う	4,422			からすると	844	2級

2. 否定の意志を表す「まい／(よ)うとしない」

否定の意志を表す「まい／(よ)うとしない」を取りあげ、これらの意味・用法の違いについて分析する。

第9章

伝聞を表す表現

小西 円

1. はじめに

この章では、伝聞を表す表現について、共起語や文脈の観点から分析を行う。伝聞を表す表現は、「ということだ」のように、基本的に文末で用いられる形式と、「聞くところによると」のように、文末以外で用いられる形式がある。文末には普通体や丁寧体などの文体差が生まれるため、この章では、文末で用いられる形式については、文体の異なりを考慮して分析を行う。場合によっては「ございます」など(仮に「敬語体」と呼ぶことにする)も考察の対象に含める。

この章で扱う形式を表1に示す。「とのことだ類」「聞くところ類」のように、「類」がつくものは、複数の形式を含む。たとえば、「とのことだ類」には「とのことだ」「とのことです」などが含まれる。

伝聞を表す表現は、1つの形式が複数の用法を持っているものが多い。たとえば、「ということだ」という形式は伝聞用法以外にも「つまり、～ということだ。」のような使い方もあるため、目視による用例の分類が必要である。形式としての総出現数が1万を超えるものは、1,000～2,000例を無作為抽出したうえで目視で用法を分類し、伝聞率を算出した。伝聞率とは、全用法の中で伝聞用法が占める割合とする。表1に伝聞率が記載されているものは、目視による分類を行ったものである。たとえば、「ということだ類」

第 10 章

否定を表す表現

茂木俊伸

1. はじめに

この章では、否定を表す「ない」を含むいくつかの文末表現について、その共起語と文脈の特徴を分析する。扱う形式とその出現数は、次の通りである。データは、『中納言』の短単位検索と文字列検索を利用して収集した。

表 1 この章で扱う形式と BCCWJ における出現数、該当レベル

	形式	出現数	該当級
“二重否定”の表現	なくはない類	571	
	ないではない類	464	
	ないことはない類	385	2 級
“不可避”を表す表現	ざるをえない	4,421	2 級
	ずにはいられない類	827	2 級
	ないわけにはいかない類	348	
	しかない	4,183	2 級
	ほかない類	795	2 級
「ない」の位置が問題となる表現	「はずだ」の否定形	5,789	3 級
	「つもりだ」の否定形	1,609	(3 級)
	「そうだ」の否定形	2,847	(3 級)
	「べきだ」の否定形	1,160	2 級